〔チーム研究９〕父親・男性研究（主任研究者　川井　尚）

父親・男性研究 III

－F･SCT（父親用文章完成法）による検討－

愛育相談所　川井　尚・安藤朗子・武島春乃・山内浩子
永井桃子・堤　道子・庄司順一
研究企画・情報部　中村　敬
研修部　長坂典子
愛育病院心理福祉室　小玉夕香
愛育幼稚園　岸井慶子
恒次欽也（愛知教育大学）・馬岡清人（埼玉工業大学）
嘱託研究員　大藪　泰（早稲田大学）・渡邉　寛（彩の子ネットワーク）
鈴木眞弓（東邦大学医学部附属大橋病院）
平岡雪雄（浦安市教育委員会）・島　智久（浦安市療育センター）
伊藤嘉余子（日本社会事業大学大学院）・山岡テイ（情報教育研究所）
木頓真美（大阪府衛生会附属診療所）・栗原佳代子（神奈川工科大学）
谷口和加子（女子栄養大学）

【要　約】 今年度は448人の父親を対象に，われわれ研究チームが作成したF・SCTを施行しその分析，検討を行った。その分析方法は，①F・SCTの反応分類とその頻度の傾向，②F・SCTの領域間の相関関係，③選択式質問項目とF・SCT項目とのクロス集計からの関係，④データマイニング手法（パーティション法）による，F・SCTの項目間の関連についての分析を行い，父親・男性の本態に関してある程度の知見が得られたので報告した。①各領域毎にみたところおおむね叙述・考え方が多く，父親・男性の一般的傾向を示すものと考えられた。ただし，領域Ⅳ「父親自身の親子関係」のみ関係性が多かった。②各領域ならびに合計点間で相関係数を検討したところ合計点，領域Ⅰ「育児を含む父子関係」，Ⅱ「家族・夫婦関係」，Ⅲ「父親自身・男性性」の3つの領域間では比較的高い相関が得られた。③クロス集計し，統計的に有意なもののみ取り上げた。一連の結果から，子どもの心の問題は母子関係にのみ起因するものではなく，父親(夫)，母親（妻），そして子どもという3者の関係，さらには父親（夫）自身の親子関係のありようも加わりもたらされるものと考えてよいと思われた。④パーティション分析全体を通して明らかになったことは，あるパターンに入る父親（夫）たちが心の臨床からみて要注意であり，援助の必要性が示された点であった。また，男性像の認識が家族像，自己の将来像，夫婦関係，子どもとの関係に影響する一要因となり得ることが示唆された。今後，母親用M・SCTの反応と比較検討し，臨床上有用な知見を得たいと考える。

見出し語：男性性，父子関係，父親自身の父子関係，家族・夫婦関係

A Study on Paternal and Masculine Gender Role III
-The Analysis of the Sentence Completion Test for Father(F・SCT)-

Hisashi KAWAI, , Akiko ANDO, Haruno TAKESHIMA, Hiroko YAMAUCHI, Momoko NAGAI, Michiko TUTUMI, Junichi SHOJI, Takashi NAKAMURA, Wakako TANIGUCHI, Noriko NAGASAKA, Yuka KODAMA, Keiko KISHII, Kinya TUNETUGU, Yutaka WATANABE, Yasushi OOYABU, Kiyoto UMAOKA, Mayumi SUZUKI, Yukio HIRAOKA, Tomohisa SHIMA, Kayoko ITO, Tei YAMAOKA, Mami KIMURA, Kayoko KURIHARA

Abstract: We carried out the F･SCT for 448 fathers, and analyzed the responses. The methods of the analysis were 1) to classify the responses and to show frequency ratios of the classification, 2)to examine the correlation among 5 fields of the F･SCT, 3)to examine the relations between the questionnaire items and the responses of the F･SCT, 4) to analyze the relations among the F･SCT items using the data-mining method(partition method). The results of 1)～4)were as follows. 1) In the most fields of the F･SCT, the responses were almost descriptive. We regarded that this result is the common tendency of father(masculine gender). But, in the field Ⅳ,"a father and his parents relationship", many mentioned the relationship between them. 2) Field Ⅰ,"a father and child relationship, included child rearing", field Ⅱ,"a family / couple relationship", field Ⅲ,"father himself/masculine gender", and total were highly correlated each other. 3) As the conclusion, children's mental problems are caused by not only a mother and child relationship, but also a father(husband)-mother(wife)-child relationship, and a parents and child relationship of father himself. 4) Some fathers who classified a specific pattern may be high risk of mental illness, and need the help. The consciousness of masculine gender has influence on the image about family, about his future life, a couple relationship, and a father and child relationship. In future, we'll compare the results of F･SCT and M･SCT.

Key word: masculine gender, father and child relationship, father and child relationship of father himself, family / couple relationship

Ⅰ　研究目的

平成 13 年度より，父親が育児を母親とともに行うとき，その果たす基本的役割とは何かを研究目的とし，筆者らの従来の研究知見とその再吟味から，父親(夫・男性)・母親(妻・女性)・子どもの 3 者関係を明らかにする必要があること，更に男性研究の視点を加えることが重要であると考え，改めて父親・男性研究をテーマに研究をすすめることとした。また，研究方法としては，父親像を浮き彫りにするために父親の生きた声を聴きとる臨床心理検査の一技法である文章完成法(SCT)を採用することとした。この F・SCT(ならびに母親(妻)用である M・SCT)の作成手順については文献 1 を参照されたい。

平成 13 年度は F・SCT を用いたパイロット研究を行った。その際に F・SCT について本研究の中核的な視点である，「関係性」を視点に置いて，各項目を 5 つの領域に分け，それぞれの主な反応を読みとり，その評定を試みた。

その結果，F・SCT の反応は，いくつかの下位分類を持つ「関係性」，および「情緒性」，「叙述・考え方」の 3 つが主な反応であり，さらに「困惑・当惑」「その他」に分類された。従って、本研究の目的である，男性性を含めた父親(夫・男性)，母親(妻・女性)，子どもの 3 者関係そのものの関係性を検討しうるとの結果を得た。

また，平成 14 年度は本調査票のうち，乳幼児をもつ父親 (夫・男性) ・母親 (妻・女性) の役割に関する質問項目 (多肢選択式) の単純集計と両親の回答比較を行った。調査対象は，父親・母親のペア 448 組である。

その主な知見は以下のようである。①夫よりも妻の方が，「母親固有の役割」を認識している。即ち夫は，父親固有の役割の認識が妻のそれよりも低い。②最も大事にしたいことについて，夫は「人間としての生き方」をより選択し，妻は「私個人としての生き方」をより選択している。③妻の方が母親として苦悩することが父親のそれよりも強く，母親の育児の困難さを示し，育児不安のひとつの発生要因であると考えられた。④父親の役割について，妻は「私の相談相手・精神的な支え」を強く求め，一方，夫は，妻が求めるほどこの役割を認識していない。このことも母親の育児不安の発生の一要因である。

これらの知見をふまえて今回は，①F・SCT の反応分類とその頻度の傾向，②F・SCT の領域間の相関関係，③選択式質問項目と F・SCT 項目とのクロス集計からの関係，④データマイニング手法(パーティション法)による，F・SCT の項目間の関連についての分析を行い，父親・男性の本態に関してある程度の知見が得られたのでここに報告する。

Ⅱ　研究方法

1. 調査方法

平成 13 年度に報告した父親用文章完成法(F・SCT)ならびに，それの母親版にあたる母親用文章完成法(M・SCT)を，下記に述べる各地の幼稚園，保育所等を通して配布し，回収した。F・SCT は 32 項目，5 つの領域から構成されている。その領域は，Ⅰ.育児を含む父子関係(12 項目)，Ⅱ.家族・夫婦関係(7 項目)，Ⅲ.父親自身・男性性(9 項目)，Ⅳ.父親自身の親子関係(2 項目)，Ⅴ.社会(友人・仕事)(2 項目)である。また，選択式質問項目は 1. 父親(夫)の役割，2. 子どもとの関わり・子育て，3. 両親との関わり，4. 両親の親としてのあり方，5. 大事にしたい生き方，6. 夫・父親としてのあり方，7. 夫・父親役割(選択肢は各 10 項目あり，そのうちの 2 つまで選ぶ)である。

質問紙の作成経過などの詳細は平成 13 年度報告を参照されたい(川井ほか，2002)。

2. 調査対象

調査対象はおもに，幼稚園，保育所，子育てサークル等に通所する児をもつ親である。回答の際には両親が相談したり，見せ合うことなく単独に回答するよう特に求めた。

対象地は東京，秋田，埼玉などで回収率は 80％程度である。なお，今回分析の対象としたのは，乳幼児を有する親であり，かつ，両親がペアで回収できた 448 組であり，全体回収数の 45.5％である。ペア回収数が少ないが分析年齢対象外を全体から外すと 63.1％がペア数となる。

対象者の属性は夫の平均年齢 35.4 歳，妻 33.1 歳，子どもの平均数は 1.7 人，夫の平均週労働時間 50.7 時間(±13.2)，妻は 33.2 時間(±14.7)，夫の勤務形態は主に日勤 90.3％，妻の仕事では主婦が 60.9％，常勤 21.3％，パート・アルバイト 9.4％，自営業 3.6％，休職中 2.2％などであった。夫の再婚者は 5.6％，妻は 2.7％である。夫の両親ともに健在なのは 73.8％，妻は 77.9％だった。ボランティアなどをしている夫は 13.1％，妻は 10.6％である。

3. 結果の整理方法

F・SCT は平成 13 年度研究の課題となっていた反応のカテゴリ化を行った(表 1 参照)。主な反応として 5 つ(A～E)のカテゴリが抽出され，さらに D(困惑，当惑)以外は，内容によって肯定的(+)，両価的(±),否定的(－)があり，平成 13 年度と異なるのは A：情緒性，B：関係性，C：叙述・考え方，D：困惑・当惑，E：その他，R(回答拒否)と F(回答失敗)および無回答の 6 カテゴリ(6 分類，R，F，無回答を 1 カテゴリ(分類)として)になったことである。この一連のカテゴリ化は

SCT の質的分析と量的分析とをある程度両立させるために行ったものである。この表 1 の反応分類評定に基づいて，SCT の反応すべてをコード化した。このコードに基づき，分析をより単純化し，数量化するために，さらに肯定的反応に「1」，否定的反応に「－1」，両価的，無回答，ニュートラルには「0」を配点し，再カテゴリ化(3 分類)をはかった。

これらのデータに基づき，今回は次の 4 つの視点から検討を行った。

①F・SCT の反応分類とその頻度の傾向に関しては，上に述べた反応分類に基づき，あらかじめ区分してある 5 領域(領域Ⅰ「育児を含む父子関係」12 項目，領域Ⅱ「家族・夫婦関係」7 項目，領域Ⅲ「父親自身・男性性」9 項目，領域Ⅳ「父親自身の親子関係」2 項目，領域Ⅴ「社会(友人・仕事)」2 項目)ごとにその反応頻度をまとめた。各領域の F・SCT 項目とその具体的な反応は表 2 を参照されたい。

②F・SCT の領域間の相関関係に関しては，反応を上記のように得点化し，それに基づき領域ごとの得点合計を算出し，さらに，総点を求め，ピアソンの相関係数を算出した。

③選択式質問項目と F・SCT 項目との関連については，上述した 3 分類と，選択式質問項目とをクロス集計した。また，分類についてはその＋，－などを考慮せず情緒性，関係性，叙述・考え方，困惑・当惑，R と F の 6 分類に分けた分析に関しても同様に行った。

選択式質問項目の場合，1．父親(夫)の役割，5．大事にしたい生き方の 2 項目は回答が一つの選択肢に集中したためにクロス集計からは外した。また，2．子どもとの関わり・子育ては「夫婦は一体となって子どもと接する」，「夫婦はそれぞれの立場で子どもと接する」，3．両親との関わりは「両親はともによく遊んで(関わって)くれた」，「母親はともによく遊んで(関わって)くれた」，「両親はともにあまり遊んで(関わって)くれなかった」，4．両親の親としてのあり方は，「両親ともに良いお手本，両親よりも自分たちなりに」，6．夫，父親としてのあり方は「夫・父親ともに苦悩することが多い」，「夫・父親として苦悩することはない」にそれぞれ回答選択肢を絞って，クロス集計を行った。いずれも χ 自乗検定を行い，有意なもの($P<0.05$)のみを結果として取り上げた。

④F・SCT に関するデータマイニング手法(パーティション法)について述べる。データマイニング手法の一つとして知られる決定木(パーティション)分析を行った。

このパーティション分析とは，SAS 社の統計パッケージ JMP(v.5.01J)によるものであるが，従属変数(目的変数)の結果を説明変数によって枝分かれ上に細分化していくつかのグループに分けていく統計手法をいう。この手法は量的データだけでなく，質的なデータにも適用できるので SCT 法を用いたデータにも適用できる。従属変数が量的尺度の場合は回帰木，質的尺度の場合は分類木という。

具体的にはたとえば，「子どもと私は」に関し，肯定的，両価的等，否定的という 3 分類の場合，この 3 種の反応がほかの SCT 項目の反応によってグループ分けすることができるかどうかということである。理想的にはこの 3 分類の反応の仕方それぞれについてほかの SCT 項目の反応の仕方が 1 対 1 対応すれば，たとえば「子どもと私は」という項目への反応のあり方が肯定的である場合，ほかのいくつかの SCT 項目の反応のあり方も肯定的であれば，さらに，同様に否定的である場合に，いくつかの SCT 項目によって「子どもと私は」の反応を説明できることになり，因果関係とまでいえなくても何らかの関係が生じていることがわかる。一般的にクロス集計の場合は 2 つの項目間の関係だけであるが，このパーティション分析では一つの従属変数に複数の説明変数を取り上げて分析できる点でより一層，さまざまな項目間の関連(反応パターン)を見ていくことが可能になるとされている。

今回の分析では本研究の目的を果たすために SCT 項目のうち「子どもと私は」(父性)「私は男として」(男性性)「妻と私は」(夫婦関係―夫)「父と私は」(自身の父親関係―父性)の 4 つを従属変数として，それぞれについて残りの SCT31 項目を説明変数として分析を行った。

Ⅲ 結果と考察

1. F･SCT の反応分類とその頻度の傾向に関して

結果の整理方法で述べたように，分類やその下位記号が増えたことから平成 14 年度と直接的な比較はできない。表 6 をみると(小計欄)，領域Ⅰ「育児を含む父子関係」でもっとも頻度の高いのは叙述・考え方の 49.6％，次いで関係性の 27.4％であった。

領域Ⅱ「家族・夫婦関係」は同じく，叙述・考え方で 44.7％，次に情緒性の 26.3％であった。

領域Ⅲ「父親自身・男性性」は叙述・考え方 63.4％，情緒性の 17.1％である。

領域Ⅳ「父親自身の親子関係」は関係性が最も高く 56.3％，叙述・考え方が 29.5％である。

さらに領域Ⅴ「社会(友人・仕事)」は，叙述・考え方が 79.4％で関係性が 7.3％であった。なお，具体的な反応内容の主な例は表 2 を参照されたい。

以上のように，領域Ⅳにおいて関係性が多いことを除けば他の領域は叙述・考え方の回答が多く，次いで関係性に関わる回答が多い。領域Ⅳの自分の親子関係の方が領域Ⅰの父子関係よりも関係性の反応が高いことは注目される知見である。換言すれば結婚や妻の出産による，新たに生じた家族・夫婦関係の方が自身の

親子関係よりも叙述・考え方の回答が多いと言うことである。このことは，我が子との父子関係よりも自身の父親とのある意味での関係の深さを感じさせるものがある。

次に各領域ごとに詳細にみると以下のようである。

まず，領域Ⅰの父子関係では叙述・考え方のCn22.9％，C+18.4％と高く，他はすべて 10％未満で幅広く分散している。このことから父子関係を基本的には叙述・理屈，理論的なとらえ方－これは一面では紋切り型といっても良い反応をするものが多いが，回答の分散状況から多様な見方，考え方がなされている面もうかがえる。

領域Ⅱの家族・夫婦関係においても叙述・考え方が多く，それも C＋が多くみられることが特徴的である(30.6％)。次いで，情緒性の A+も多いが(13.7％)，A±といった両価的な回答(11.0％)も同じ程度にみられる。肯定的な叙述や情緒性がみられるが，この両価的な情緒性の多さは夫婦・家族内の葛藤をうかがわせるものと考えられる。

領域Ⅲ「父親自身・男性性」は C+だけで 38.4％占めている。ついで C±の 15.6％であり，個々の回答自体はそれぞれであるにしても，決まりきった反応が生じている。おそらく，母親(妻)の場合では母親自身・女性性に関してはもっと複雑な思いが現れることが予想され多様な分類に分岐することが現在すすめている反応分類から推測される。

上に述べたように，領域Ⅳ父親自身の親子関係は，関係性が特徴的であったが，この内容をみると，叙述・考え方 Cn21.9％で次いで情緒的関係性の B1+が17.5％，他は 10％未満で分散している。父親に関しては自己の親子関係の見方が叙述・考え方と情緒的関係性に 2 極化していることをうかがわせる。その具体的な内容からは歴史的な関係の浅い，また，母親に比べれば心理・社会的な関係が強い(心理・生物学的な関係が弱い)と考えられる父親のありかたも認められる。

今後分析予定の母親(妻)M・SCT の場合は母子関係の関係性が高く，叙述・考え方の回答の割合が低くなるのではないかと予想される。

領域Ⅴ「社会(友人・仕事)」は C+が 50.3％にも達し，次いで，Cn15.7％，C±12.1％と叙述・考え方が圧倒的である。仕事や友人に関しては共通した(紋切り型とも言えるような)考え方が男性にはあるのかもしれない。

全体を通して，この領域ごとの分類の分析は領域を構成する項目群を詳細にみるとその分類や記号化にかなり幅があり，関係性がとりわけ強く現れる項目など，項目自体の特徴が認められることがわかった。今後，さらに，領域ではなく項目ごとに上述の分析を行っていきたい。これによってより詳細な，おそらくは，臨床的にも意味のある結果が得られるかと思われる。

2. F・SCT の領域間の相関関係

各項目への反応を数量化するために，上に述べたように「＋1」(肯定的)から「0」(両価的・中間的)，「－1」(否定的)の 3 分類に再カテゴリ化した。このスコアに基づき，領域ごとの得点を求め，さらに F・SCT32 項目の総点を求めた。これらの合計点に基づき領域間の相関係数を算出した。(表 3 参照)

領域間の相関係数は.314 から.683 でいずれも有意であった。特に領域Ⅰ(育児を含む父子関係)，領域Ⅱ(家族・夫婦関係)，領域Ⅲ(父親自身・男性性)の 3 者間では.565 から.683 とある程度高い正の相関が認められたことからより関連の深い項目群であり注目される知見といえる。いいかえると，F・SCT について，ある領域において肯定的な回答を示す父親(夫)は，他の領域でも同様に肯定的に，一方，否定的な父親(夫)は他の領域においても否定的であるということである。相関値が低かったのは領域Ⅳ「父親自身の親子関係」とⅤ「社会(友人・仕事)」による組み合わせでこれらは領域を構成する項目が 2 つずつしかないことによるものと思われる。

また，F・SCT 合計点と各領域の相関では.560 から.908 と高い相関が得られた。とりわけ，領域Ⅰ(育児を含む父子関係)，領域Ⅱ(家族・夫婦関係)，領域Ⅲ(父親自身・男性性)と合計点では.831 から.908 とかなり高く，合計点を左右するのはこの 3 領域の項目群であるといえよう。このことから合計得点を求めれば，父親(夫)の F・SCT に関する項目の全体的な反応が，否定的傾向を有するのか，肯定的なのか，あるいは両価的・中間的傾向を有するのかがおおむね把握できるものといえる。

F・SCT の合計点が「－」方向である父親(夫)はさまざまな問題を抱えているものと推測できる。ただし，SCT は臨床心理検査法の一つであるから，ひとつの項目がきわめて特異的である場合には，たとえ合計点が「＋」であったとしても何らかの心の問題を抱えている場合もありうるのであり，各項目の反応を吟味した上で合計点をみていく必要があろう。

3. 選択式質問項目と F・SCT 項目とのクロス集計からの関係

1)F・SCT 再カテゴリ(3 分類)とのクロス集計

①子どもとの関係，育児(表 4－1)

a.「妻と私は」(領域Ⅱ)

「夫婦一体で子どもと接する」とする場合，肯定的が71.9％，「夫婦はそれぞれの立場で」は，60.1％と約 10 ポイントほど夫婦一体の肯定度が高くなっている。逆に両価的・中間的(ニュートラル以下同じ)は「夫婦はそれぞれの立場で」が 10 ポイントほど高くなっている。

b.「妻と子どもは」(領域Ⅱ)
「夫婦一体で子どもと接する」72.7％は「夫婦はそれぞれの立場で」62.8％よりも約 10 ポイント肯定的が多い。反対に両価的・中間的が 12 ポイント，後者が増えている。

c.「子どもがいうことをきかないと」(領域Ⅰ)
「夫婦一体で子どもと接する」20.2％は「夫婦はそれぞれの立場で」31.4％よりも約 10 ポイント否定的が少なくなっている。

以上の 3 項目の結果から，「夫婦一体で子どもと接する」場合は妻子の関係を肯定的に見ていることが多く，子どもへの対応も否定的であることが少なくなっている。子どもへの関わり方や妻子の関係が夫婦の子どもへの接し方により影響される傾向を示すもので重要な知見といえる。

②両親との関わり(表 4－2)

a.「母と私は」(領域Ⅳ)
「両親はあまり遊んで(関わって)くれなかった」場合，母と私の関係は否定的が 31.9％，肯定的が 19.1％であり，「両親はともに遊んで(関わって)くれた」あるいは「母親はともに遊んで(関わって)くれた」に比べて，自分の母子関係を否定的に捉えがちであることがわかった。

b.「父と私は」(領域Ⅳ)
「両親はあまり遊んで(関わって)くれなかった」場合，父と私の関係が否定的は 41.5％で，肯定的が 22.3％であった。さらに，上に述べた「母と私は」との大きな違いは，「母親はともによく遊んで(関わって)くれた」場合においても，「父と私は」について否定的認識が 38.9％いるということである。言いかえると，母親との関係性は良くても，父親との関係性の良くない人たちがいることを意味していると思われる。

c.「子どもがいうことをきかないと」(領域Ⅰ)
「母親はともに遊んで(関わって)くれた」場合にも「両親はあまり遊んで(関わって)くれなかった」場合にも，否定的傾向が認められ(それぞれ 32.6％，28.7％)これも上記の父親との関係に類似した傾向がある。子どもへの対応の仕方はある程度，自分の親との関わりの程度，とりわけ父親がどれくらい関わってくれたと思うかによって影響されることを示した知見といえる。

d.「私にとって家族は」(領域Ⅱ)
「両親はあまり遊んで(関わって)くれなかった」場合は家族についてやや否定的が多い(12.8％)が，上に述べてきた項目よりは少ない。

以上の 4 項目から，自分の両親，あるいは父親，母親との関わりのあり方は，母親や父親への認識，子どものあり方への対応に影響を与えるといえよう。

③両親のあり方(表 4－3)

a.「母と私は」(領域Ⅳ)
「両親ともに良いお手本」の場合，自分の母親との関係は肯定的(45.5％)で，「両親よりも自分たちなりに」では 20 ポイント差の 25.5％であった。母親との関係のよさは両親をモデル化するかどうかに影響を与えていることをうかがわせる。

b.「妻と子どもは」(領域Ⅱ)
「両親ともに良いお手本」の場合，自分がみる妻子の関係は否定的が 7.0％にとどまるが「両親よりも自分たちなりに」では約 2 倍の 14.6％であった。

c.「父と私は」(領域Ⅳ)
上記の「母と私は」の回答と同様の傾向を示し，「両親ともに良いお手本」の場合，自分の父親との関係は肯定的(42.2％)で，「両親よりも自分たちなりに」ではほぼ 20 ポイント差の 22.9％であった。

この 3 つの結果から両親が自分にとっての良いモデルとなり得る場合は両親との関係を肯定的に認識していることによるものと推測される。

④夫，父親として(表 4－4)

a.「妻と私は」(領域Ⅱ)
「夫・父親として苦悩することが多い」場合(60.5％)よりも「夫・父親として苦悩することはない」場合(74.9％)の方が妻との関係を約 15 ポイント肯定的に捉えている。夫婦間の関係が肯定的に認識されていると，夫，父親役割に関する苦悩の程度は低下するようである。

b. しつけ(領域Ⅰ)
「夫・父親として苦悩することが多い」場合(59.9％)よりも「夫・父親として苦悩することはない」場合(70.8％)の方がしつけを約 10 ポイント肯定的に捉えている。このことによって，父親(夫)の悩みを減少させることも考えられる。

c.「子どもと私は」(領域Ⅰ)
「夫・父親として苦悩することが多い」場合(63.6％)よりも「夫・父親として苦悩することはない」場合(75.4％)の方が子どもとの関係を約 10 ポイント強，肯定的に捉えている。父子関係のよさは当然のことながら父親(夫)の悩みを減少させるものである。

d.「私はひとりでいると」(領域Ⅲ)
「夫・父親として苦悩することが多い」場合(34.0％)よりも「夫・父親として苦悩することはない」場合(45.6％)の方がひとりでいることを約 10 ポイント肯定的に捉えている。反対に「夫・父親として苦悩することが多い」場合(30.2％)は「夫・父親として苦悩することはない」場合(19.5％)よりも，ひとりでいることに関して約 10 ポイントほど否定的に捉えている。ひとりでいることを肯定的に感じられず，父親(夫)としても苦悩がある，つまり，悩みやすく心理的な困難さをもつ父親(夫)たちがいることを推測させる知見である。

e.「思い通りにいかないと」(領域Ⅲ)
「夫・父親として苦悩することが多い」場合(13.6%)よりも「夫・父親として苦悩することはない」場合(31.3%)の方が「思い通りにいかないとき」を約 18 ポイント肯定的に捉えている。反対に「夫・父親として苦悩することが多い」場合(56.2%)は「夫・父親として苦悩することはない」場合(35.4%)よりも思い通りにいかないときを約 20 ポイント否定的に捉えている。上記の「私はひとりでいると」の場合と同様に，つまずいたときもまた，父親(夫)として苦悩しがちなのである。また，全般的な心理的困難さを抱えていることが推測される。

f.「子どもは私を」(領域Ⅰ)
「夫・父親として苦悩することが多い」場合(50.0%)よりも「夫・父親として苦悩することはない」場合(57.9%)の方が子どもとの関係を多少であるが約 8 ポイント肯定的に捉えている。反対に「夫・父親として苦悩することが多い」場合(30.2%)は「夫・父親として苦悩することはない」場合(18.5%)よりも子どもとの関係を約 12 ポイント否定的に捉えている。上に述べた「子どもと私は」と同様のことが指摘できる。

g.「暴力」(領域Ⅲ)
「夫・父親として苦悩することが多い」場合(60.5%)よりも「夫・父親として苦悩することはない」場合(74.4%)の方が暴力を約 14 ポイント肯定的に捉えている。ここでいう肯定的とは，暴力そのものを否定するという意味である。
「夫・父親として苦悩することが多い」場合(31.5%)は「夫・父親として苦悩することはない」場合(17.4%)よりも暴力を約 16 ポイント両価的・中間的に捉えている。

以上のことから，「夫・父親として苦悩することが多い」父親は父子関係，夫婦関係においてとりわけ多くの問題を抱えているものと推測できる結果となった。子どもとの関係，妻との関係がストレートに反映しているようである。

2)F・SCT6 分類からのクロス集計(表 5)

各分類(A：情緒性，B：関係性，C：叙述・考え方，D：困惑・当惑，E：その他，R(回答拒否)と F(回答失敗))と，選択式質問項目 2，3，4，6 とのクロス集計を行い，有意なクロスから主な結果について述べたい。ここでは意味のあると思われるものはほとんどなく，次の 1 項目のみであった。おそらく，反応の「＋」「－」が相殺されたためだろう。

①「思い通りにいかないと」(領域Ⅲ)
「夫・父親として苦悩することが多い」場合(57.4%)は「夫・父親として苦悩することはない」場合(31.3%)よりも思い通りにいかないとき，約 26 ポイント情緒性のある反応を示している。それとは反対に「夫・父親として苦悩することが多い」場合(36.4%)よりも「夫・父親として苦悩することはない」場合(60.5%)の方が思い通りにいかないとき，約 14 ポイント，叙述的な反応を示している。父親(夫)として苦悩することが多いことが，思い通りにいかないことに遭遇した時に情緒的に混乱した反応を示し，苦悩の程度が低い人たちはありきたりの反応をしている。

以上，クロス集計の結果をまとめてきたが，父親(夫)としてのありようが，自分の親，妻，子どもとの関係，あるいは妻子の関係によって，かなり影響されていることが当然の結果とはいえるものの改めて明らかになったといえる。

この一連の結果から，子どもの心の問題は母子関係にとどまらず，父親(夫)，母親(妻)，そして子どもという 3 者の関係，さらには父親(夫)自身の親子関係のありようが影響を与えるものと考える。したがって，相談に来所する子ども，あるいは多くの母子との面接に当たっては，父親(夫)への援助を中心とした面接をも視野に入れておく必要があるともいえる。これは心理職に限らず，乳幼児健診や育児相談においても同様であろう。

4. F・SCT に関してデータマイニング手法(パーティション法)による，F・SCT 間の関連に関する分析

分析方法に関しては方法の項で説明したが，今回，従属変数として F・SCT の「子どもと私は」「私は男として」「妻と私は」「父と私は」の 4 つを採用した理由を述べる。平成 13 年度から「父親・男性」研究を開始した意義については本研究の報告Ⅰを参照されたい。「子どもと私は」「父と私は」の 2 つは父親像に関わるものとして，また，「私は男として」は男性像，「妻と私は」は妻との関係での夫像としてとらえられるもので，それぞれについて，他の SCT 項目との関連を調べることは本研究の目的と照らし合わせて意義のあることと考えた。

各項目は先述したようにいずれも肯定的反応に「1」，否定的反応に「－1」，両価的，無回答，ニュートラルには「0」を配点したデータに対して分析を行った。

パーティション分析の結果は図 1～4 に示したがその読みとり方は図 1 に注釈を付したので参考にされたい。

1)「父と私は」(図 1)
「母と私は(－1)」「性生活(－1)」「私の居場所は(－1)」の場合，「父と私は(－1)」が 26 人(96.3%)と多い。父親との関係が悪い父親(夫)は母親とも関係が良くなく，また，妻との性生活もうまくいかず，自己の居場所にも否定感情があり，家族に恵まれない人たちである。従って，こうした父親(夫)の家庭生活には困難を伴うことが十分予測され支援，援助を必要としている

ことがわかった。

「母と私は(1, 0)」「同(1)」「妻が病気になると(1, 0)」では「父と私は(1)(0)」がともに多く，同(0)は63人，43.2%，同(1)は67人(45.9%)であった。父親との関係が肯定的か，両価的・中間的な認識を有する場合に，母親との関係は肯定的で妻の病気にもおおむね肯定的，あるいは両価的・中間的認識を持つということである。ただし，全体的にみて，自分の父子関係に関しては以下に述べる項目に比べて，肯定的なパターンは少なく，むしろ，肯定的と両価的・中間的が相半ばするパターンが多いようである。むしろ，この父子関係では否定的認識を抱く父親(夫)に関して，特徴的なパターンが現れると言える。したがって，臨床的な問題を生じる可能性がある父子関係像がみられたと言えるかもしれない。

2)「子どもと私は」(図2)

「私は男として(1, 0)」「私にとって子どもは(1, －1)」「思い通りにいかないと(－1, 0)」「私の居場所は(1, －1)」で「子どもと私は(1)」166人(75.5%)が多い。ただし，比率的には4分の3程度にとどまった。むしろ「私は男として(1, 0)」「私にとって子どもは(1, －1)」「思い通りにいかないと(1)」「妻と私は(1, 0)」のパターンでも「子どもと私は(1)」77人(91.7%)が子どもとの関係で(1)の割合が高くなっていることからこのパターンが重要であると考えられる。

子どもと私の関係を肯定的にみている場合，男性像は肯定的である。また，自分にとっての子どもについては，思い通りにいかない場合に肯定的である場合は夫婦関係が肯定的，両価的・中立的に捉えられている。

この分析の特徴は子どもとの関係を否定的に認識している父親(夫)が少ないために，特徴が見えにくく人数的にはかなり少ないが，「私は男として(－1)」「暴力(－1)」「しつけ(－1)」のパターンで「子どもと私は(－1)」の9人(100%)は，要注意群であり，子どもへの虐待のリスクを考えておく必要がある。

3)「妻と私は」(図3)

「子どもが生まれてから(1, 0)」「妻とふたりでいると(－1, 0)」「母と私は(1, 0)」では「妻と私は(1, 0)」が71人と多い。ただし，このパターン内では63.4%にとどまる。むしろ，「子どもが生まれてから(1, 0)」「妻とふたりでいると(1)」「子育ては(1)」「性生活(1)」「父と私は(0, －1)」では「妻と私は(1)」が40人91.6%であり，このパターンの最終分類木「父と私は(1)」では31人100%であって，最後の「父と私は」のところで2極化するものの夫婦関係は肯定的に認識されている一群の父親(夫)たちがいる。逆に，「子どもが生まれてから(－1)」「将来，私は(－1)」「父と私は(－1)」では「妻と私は(－1)」12人(92.3%)という夫婦関係の否定的認識と，子どもが生まれてから，自分の将来，父親との関係の悪さが結びついており，父親像の悪さ，自己否定的な感情を有する父親(夫)がおり，この人たちには臨床的な配慮を要するように思われる。

4)「私は男として」(図4)

「私にとって家族は(1, 0)」「将来，私は(1)」「妻と私は(1)」のパターンでは「私は男として(1)」197人83.8%であった。また，「私にとって家族は(－1)」「子どもは私を(－1)」では「私は男として(－1)」23人88.5%が多いことがわかる。

ここで示された知見は「私は男として(＋)」と肯定的認識であるものは家族は肯定的か，両価的・中間的，自分の将来や夫婦関係ともに肯定的認識をもっていることである。反対に，自己の男性像を否定的に認識している父親(夫)の中には家族への認識，子どもとの関係(子どもが自分をどのようにみているか)においてともに否定的認識をもつ一群の人々がいる。

男性像の認識のありようが家族像，自己の将来像，夫婦関係，子どもとの関係において重要な一要因となりえることが示されたといえよう。従来，夫あるいは父親像が子どもや妻との関係に大きな影響をもたらすものと考えられていたが，それだけでなく，男性像もまた，関係していることが示唆され，本研究が男性研究の視点をもってなされたことに意義が認められた。

パーティション分析全体を通して明らかになったことは，あるパターンに入る父親(夫)たちが心の臨床からみて要注意であり，援助の必要性が示された点である。われわれが，育児不安研究を通して「子ども総研式・育児支援質問紙」※を開発したが，この一連の研究で浮き彫りにされたパターンが，更に類型的に提示されたように考え，父親用の育児不安評定尺度の必要性が示された。以上の知見から，今後こうした視点からの研究が要請される。

今回はパーティション分析としては人数が少なく，今後対象者数が増えれば，相当程度の父性，男性性，夫像をより明確なパターンとして示すことができると考える。

結語

本研究で得られた結果から主な研究知見を示すと次のようである。

1.「育児を含む父子関係」・「家族・夫婦関係」・「父親自身の男性性」の3つの領域間には、強い相関関係が認められる。

即ち、いずれかの領域が肯定的なものは、他の領域

においても肯定的であり、ひとつの領域が否定的であれば他の領域も否定的である。

2.「夫婦一体で子どもを育てる」ことは「妻と私」「妻と子ども」について、肯定的に認識し、「子どもがいうことをきかないとき」への対応も適切である。「夫婦で子育て」は、重要なポイントである。

3. 自分の両親ないし、母親、あるいは父親との関わりのありようは、自分の子どもとのあり方、子どもへの対応によい影響を与える。即ち、自分の親とよい関係をもつものは、子どもとの関係も良好である。

4.「自分の両親をよいお手本」とするものは、妻と子の関係を肯定的にみている。また自分の母親との関係の良さは、両親を自分のモデルにする傾向にある。

5. 夫・父親としての苦悩について

a.「夫・父親として苦悩することが多い」と、＊ひとりでいることが苦痛で耐えられない　＊思い通りにいかないと情緒的に混乱した反応を示し心理的な困難を抱える　＊子どもとの関係を否定的に捉える。

b.「夫・父親として苦悩することがない」と、＊妻との関係を肯定的に捉える　＊しつけも適切になされ　＊子どもとの関係を肯定的に捉える　＊思い通りにいかない時も適切に対応する。

即ち、「夫・父親としてのありよう」は、自分の親、妻、子どもとの関係、妻と子とのありようと関連を有している。

従って、子どもの心の問題も、父親(夫)、母親(妻)、子どもの 3 者関係の中で生じること、またここに、自分の親との関係のありようも影響を与えている。そこで「夫・父親として苦悩することが多い」父親に、是非支援・援助の手をさしのべたい。

6. 自分の父親との関係が悪いと母親との関係も良くない。そして妻との性生活もうまくいかず、家庭に居場所がないことが多い。従って、育つ過程の中で、母子関係はいうまでもないが、父子関係も極めて重要であることを強調したい。

7. 子どもが生まれたことを否定的にとらえることによって、夫婦関係が否定的に認識され、自分の将来への否定的な見方が生じる。そして、父親像の悪さ、自己否定的な感情をもつ父親がおり、臨床的な援助を必要としている。

8. 男性像について

a. 子どもとの関係が肯定的な場合、男性像も肯定的である。

b. 自分の男性像が否定的で、暴力的であり、偏ったしつけの仕方、そして子どもとの関係がよくないというパターンをもつ父親がいる。心理臨床経験からも父親による虐待の増加が懸念され、その発生予防は急を要する大きな課題である。

c. 男性としての自分を肯定的に認識している父親(肯定的な男性像)は、家族、夫婦関係に対しても肯定的であり、そして、自分の将来にも肯定的な認識を有している。

一方、自己男性像を否定的に認識している父親は、家族、夫婦関係に、そして、子どもとの関係も否定的である。

即ち、男性像の認識のありようが、家族像、夫婦関係、自分の将来像、子どもとの関係をめぐって、重要な影響要因であることが示された。

従来、夫、父親像が子どもや妻との関係に大きな影響をもたらすものと考えられてきたが、男性像も極て重要な役割を果たしていることが明らかになった。

本研究の知見が指し示すものは、子どもの心身の健やかな発達のために、父親への支援、援助、相談が必要不可欠であることにある。そのためには、父親が相談行動を起こしやすくさせるための方策と、そして、乳幼児健診をはじめ、相談の場を整え、父親相談のポイントを明らかにすることが重要である。

更に、男の子をいかに「男」として育てるか、育っていけるかであり、再度幼少期からの「父子関係」の重要性を指摘したい。

今後の課題

本研究の眼目である，SCT の夫婦間比較，属性や選択式質問項目との関連，さらに SCT 項目間の関連や，テキスト分析による SCT 反応の関連の検討を行いたい。これによって現在の父親の姿を浮き彫りし，今後，父親が育児や家庭における役割に関わる基本的な知見を得たい。更に，臨床上危惧される父親の育児不安※，子ども虐待，そして DV(ドメスティック・バイオレンス)をも視野に入れた父親支援の方策を求めることも，今後の大きな課題である。

※現在、母親用育児不安評定尺度「子ども総研式・育児支援質問紙」を作成、頒布しているが、今後父親用育児不安評定尺度の作成を考えている。

謝 辞

本研究をすすめるに当たりご協力いただいた各地域の小児科，保育園，幼稚園の先生方，そして，お父さん，お母さんたちに深く謝意を表したい。

文 献

1. 川井　尚ほか：父親・男性研究Ⅰ－父親用文章完成法(F・SCT)の作成，日本子ども家庭総合研究所紀要，第38集　203-215，2002.

2. 川井　尚ほか：父親・男性研究Ⅱ－父親用文章完成法(F・SCT)の作成，日本子ども家庭総合研究所紀要，第39集　237-251，2003.

3. 育児における父親の役割に関する研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ:厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるにあたっての母子保健事業策定に関する研究」(平山宗宏主任研究者)平成元年，2年，3年度研究報告書

4. 育児における父親の役割と保健指導に関する研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ:厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」(日暮眞主任研究者)平成4年，5年，6年度研究報告書

5. 川井　尚：育児における父親の役割，小児保健研究,1992;51(6):671-680

6. 川井　尚：父親面接．心と体の健診ガイドー幼児編－．日本小児科学会・日本小児保健協会・日本小児科医会編．日本小児医事出版社．57－60．2000

※日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所　母親用育児不安評定尺度「子ども総研式・育児支援質問紙」(0～11ヶ月，1歳児用，2歳児用，3～6歳児用)

表１　反応分類評定

A	情緒性	A+, A±,A－,An
B1	情緒的な関係	B1+, B1±,B1－,B1n
B2	叙述的な関係	B2+, B2±, B2－,B2n
B3	相互的な関係	B3+, B3±, B3－,B3n
C	叙述，考え方	C+, C±,C－,Cn
D	困惑，当惑	D
E	その他	E+,E±,E－,En
R	回答拒否	R
F	回答失敗	F

注：＋肯定的，±両価的，－否定的，ｎニュートラル

表２　反応カテゴリコード別の回答例(表１の分類に見合う回答がない場合もある)

領域Ⅰ　育児を含む父子関係

項目	主な反応	コード
2. 子育ては＿＿＿＿＿	○大変だが楽しい	A+
	○大変	A±
	○大事・重要・責任	C±
	○夫婦協力・とも同作業	B2+
	○楽しみだが心配	A±
	○難しい	C±
	○難しいけど重要	C±
	○参加なし・妻任せ	C－
	○親の成長，生活の一部，日常生活，一生のこと	C
	○自論	C+
5. しつけ＿＿＿＿＿	○教える・身につけさせる	C+
	○重要・大切	C+
	○しっかり・厳しく	C+
	○厳しさと，愛情で	C+
	○親の責任・お手本	C+
	○難しい	C±
6. 子どもと私は＿＿＿＿	○仲がよい(よくなりたい)	B1+
	○幸せ・楽しい	A+
	○コミュニケーションをとり，理解	B3+
	○信頼関係	B3+
	○友だちのよう	B2+
	○よく遊ぶ	B3+
	○親子，似ている	C
11. 私にとって子どもは＿＿＿	○宝物	C+
	○大切	C+
	○かけがえのない存在・守る	C+
	○生き甲斐	C+
12. 子どもが生まれてから＿＿	○子ども中心の生活に－うれしい，仕方ない，生活パターンの変化	B2±
	○充実した	C+

	○価値観・人生観の変化	C+
	○妻との会話がふえた・よい関係に	B2+
	○子どもとともに成長	B2+
	○変わらない	E
	○ほっとかれる	C－
	○うれしい	A+
14. 子どもといると私は_____	○安らぐ・和む・ほっとする・暖かい・心豊か・やさしい・ゆっくり・幸せ・楽しい	A+
	○遊び・話したい	B3+
	○自分の子どもの頃を思い出す	C+
	○イライラ・おこりっぽい	A－

18. 子どもにとって私は_____	○大切な存在(存在でありたい，守りたい，支えたい)	C+
	○必要な人でありたい	C+
	○必要不可欠な宝物・頼りになる人・尊敬に値する人・かけがえのない人・ヘッドコーチ	C+
	○お手本	C+
	○やさしいが怖い父親	C+
22. 子どもは私を_____	○頼りにしている・必要としている	B2+
	○大好き	B1+
	○父親として頼ってほしい	C+
	○遊び相手	B3+
	○どのようにみているのか・どう思っているのか・好きなのだろうか	D
23. もしも子どもが_____	○いなければ(全く別の人生，つまらない人生)	C+
	○いなくなったら(ひどいショック，心に空洞，人生真暗，etc)	B1+
	○病気・けが・事故が心配	A+
	○犠牲を払っても守る・相談にのる	C+
26. 子どもがいうことをきかないと_____	○怒る・叱る	C±
	○意味・原因を考える・話し合う	C+
	○いいきかす・説明する・説き伏せる・厳しくいいつける	C±
	○イライラして手が出る・腹立たしく叩く・なぐってもいうことをきかす・感情的に当る，感情的になる	B1－
	○困る	D
	○ほっとく，しょうがない	C±

29. 子どもの気持ち_____	○尊重したい	C+
	○気持ちをよく考えて行動・接したい	B2+
	○大切にしよく聞いて，理解したい・汲みとりたい	B2+
	○複雑	C±
	○分かるようで分からない・時に想像し難い・分からなくなる時がよくある	D
15. 妻と子どもは_____	○大切な宝物・財産・オアシス	C+
	○密接・愛情の強い絆	C+
	○仲がよい・うまくいっている	B1+
	○仲がよくて羨ましい	B1±
	○似ている	C

領域Ⅱ　家族・夫婦関係

31. 私にとって家族は_____	○大切・大事な存在。宝物	C+
	○生き甲斐・かけがえのないもの	C+
	○守るもの	C+
	○生きるのになくてはならないもの・支え	C+
	○あったかく大きいもの・やすらぎの場	A+
4. 妻と私は_____	○補完関係・親友・人生のパートナー・ともに生きる	B3+
	○変わらぬ関係・よい関係・助け合い・仲良く	B3+
	○楽しく・幸せ	B1+
	○とも通の価値観・とも通の趣味で	C+
	○よく分からない	D
	○夫婦は他人	C
	○子育ての不一致	B2−
	○子ども中心すぎる	B2±
	○夫婦，似ている	C
21. 妻か病気になると_____	○心配・困る・大変・不安	A±
	○家族全員暗く・笑い半減・バランス崩れる	A±
	○かばう・世話する・看病・家事をする	C+
	○普段の大変さを知る・母親の存在を改めて知る	C+

30. 性生活_____	○相手を思いやる・気持ちを考える	B1+
	○大切なコミュニケーション・愛情表現の1つ・お互いの理解・慈し み合う気持ちの表れ	B3+
	○大切・大事・重要	C+
	○子どもが生まれてから思うようにいかない	D
	○少ない・余りない	B2±
	○いまいち・不満だらけ	A−
	○楽しい	A+
32. 妻とふたりでいると_____	○安らぐ・楽しい・落ちつく・ホッとする・安心・リラックス・ 幸せ・和む	A+
	○いつも子どものことを話す・考える	B3+
	○昔を思いだす・前は幸せだった	A±
	○ぎくしゃくしている	B3−
	○余り話さない	B2−
	○ふたりきりがなくなった(主に子どもが生まれてから)	C
17. 私の居場所は_____	○家庭・家族・家	C+
	○仕事(職)場と家庭	C+
	○書斎・自室	C
	○自分のイス・たたみ一畳	C±
	○車庫，車の中など	C−
	○ない	C−
	○どんなものか分からない	D
20. 家にいると_____	○やすらぐ・ホッとする・落ちつく・安心・くつろぐ・のんびり・和 む・幸せ・楽しい	A+
	○充実	C+
	○心身休まる	A
	○妻と子と一緒で幸せ・コミュニケーションが沢山とれる・とりたい・	B1+

	理解深めたい	
	○のんびりできない	A－
	○いらいらしやすい	A－
	○忙しい	C

領域Ⅲ　父親自身

1. 子どもの頃私は_____	○活発・元気・やん茶・いたずらっ子	C+
	○いい子・素直な子・静かな子・従順	C±
	○引っ込み思案・おとなしい・泣き虫・弱虫・人みしり	C±
	○両親不仲	C－
	○よくない思い出	A－
	○いろいろあった，かわいかった，ふとっていた，やせていた	C
3. 将来，私は_____	○家族を守る・幸せに	C+
	○子どもの手本に・尊敬される父親に	C+
	○家族でゆっくり・楽しく・～～したい・子ども・妻と～したい	B1+
	○(自分が)ゆうゆうと・ゆっくり安定して・老後・隠居生活を	C+
	○(自分が)人生楽しく・夢の実現・～・～したい	A+
	○分からない・どうなることか	D
10. 私はひとりでいると____	○夢を描く・想像する・いろいろ考える・空想する・物思いに耽る	C+
	○愉快・楽しみ・幸せ・自由・ゆっくり・落ちつく・のんびり・ホッとする	A+
	○孤独・淋しい・気分が落ちる	A－
	○じっとしていられない・何していいか分からない	D
	○寝てしまう	E±
	○忙しい	C
9. 私が感情的になるのは____	○プライドを傷つけられたとき・筋が通らない・理不尽・納得がいかない	C+
	○自分の欠点等指摘される・自分が責められたとき	C±
	○思い通りにいかないとき	C±
	○自分がこだわりをもちすぎて・自分が不甲斐ないから・意見等を表現できないとき	D
	○具合が悪い・疲れたとき	E±
	○よくある	C－
	○ない	C
16. 私は男として_____	○家族を守る・支える・幸せに・大切に・頼りになる	C+
	○子どもの手本・尊敬される父親に	C+
	○責任感・自立	C+
	○足りない点が多い・どうなんだろう・もうひとつしっかりしてない・魅力がない	D
	○普通	C
25. 困り果てたとき私は_____	○自分ひとりで考える・ひとりで解決する。	C±
	○妻と相談する	B2+
	○友人，周りの人に相談する	B2+
	○母親，両親に相談する	B2+
	○運命，神仏に任す・すがる	C±
	○開き直る・忘れる・目前のことのみにしておき，ピンチをぬける・気をまぎらす・楽しいことを思い出す	A±
	○投げだす・あきらめる・黙りこむ・何もする気がなくなる・どうなることかと思ってしまう	D

27. 死ぬときは_____	○家族に迷惑・家族に不安を与えないように	C+
	○家族に見守られて・自分が一番先に	C±
	○苦しまず・痛くなく・ぽっくり・あっさり・安らかに・寿命で・大往生で	C+
	○幸せだったし・満足して・後悔しない人生で・やり残しがないように	C+
	○怖い・淋しい・幸せな人生と思えるかどうか	A±
	○一人，死ぬ，しょうがない	C

19. 思いどおりにいかないと___	○いらいらする・落ちつかない・腹が立つ・人に当たる・八つ当たり・身近なものを壊したくなる	A−
	○ゆううつに・落ち込む	A−
	○頑張る・努力・工夫・トライ・成し遂げる・思う通りに何が何でもする	C+
	○原因追求・別の方法を	C+
	○あきらめる	C±
	○あたり前と思う・仕様がないと思う	C±
	○反省する・自分の責任と思って	C±
28. 暴力_____	○反対	C+
	○してはいけない・あってはならない・排除する・完全否定	C+
	○言葉の暴力もいけない	C+
	○嫌い・悲しいこと	A+
	○よくないと思っても，暴力ふるって後悔・未熟さから手が出てしまう	B1−
	○TPO で必要・時に必要な場面も・必要な時も	C±

領域Ⅳ　父親自身の親子関係

8. 母と私は_____	○似ている(価値観，考え方，性質)	C
	○仲良し・うまくいっている・よい関係	B1+
	○よき理解者	B3+
	○一心同体	C
	○今，大人になってから信頼関係	B3±
	○子離れできていない	B2−
	○関わりがなかった・思い出がない・距離がある	B2−
	○よい関係にない・否定される	B1−
	○会ってない	E
	○親子	C
24. 父と私は_____	○仲が良い・うまくいっている・よき理解者同志・心が通い合って・	B1+
	○似ている・だんだん似てくる	C
	○接触の機会がなかった・一緒の思い出がない・遊ばなかった・〜しなかった	B2−
	○父のことをよく分からない	D
	○話し合わなかった・余り話さない	B2−
	○父を越えられず腹立たしい	B1±
	○ライバル	B2
	○似ているといわれ，そう思いたくない・似ている自分が嫌	B1−
	○無関係・むずかしい関係	B2−
	○愛情を感じない関係	B1−
	○忙しい	C

領域Ⅴ　社会(友人・仕事)

7. 友人＿＿＿＿＿＿	○財産・大きい・かけがえのない	C+
	○家族の次に重要・大切	C+
	○信じ合える・心通じる	B3+
	○子どもも友人をつくり，大切に・子どもの成長に	C+
	○いる	C
	○少ない	C
	○希薄になりがち・家族との方が楽しみ	B2±
	○親友いない	C
	○本来の友人か	D
	○気をつかう	B1±
	○会っていない	E
13. 仕事＿＿＿＿＿＿	○生き甲斐・やりがいのあるもの	C+
	○なくてはならないもの・大切	C+
	○家族・子どものため	C+
	○仕事より家族が大切・家庭優先・家族はより重要	C+
	○仕事も家族も大切	C+
	○仕事と家庭の両立難しい	C±
	○生活のための道具	C±
	○忙しい，普通	C

表３　領域間の相関関係

相関係数

		領域Ⅰ育児を含む父子関係:合計点(12項目)	領域Ⅱ家族・夫婦関係・合計点(7項目)	領域Ⅲ父親自身・男性性・合計点(9項目)	領域Ⅳ父親自身の親子関係.合計点(2項目)	領域Ⅴ社会(友人・仕事).合計点(2項目)	FSCT合計点(5領域32項目)
領域Ⅰ育児を含む父子関係・合計点(12項目)	Pearson の相関係数	1	683**	.667**	.453**	422**	908**
	有意確率(両側)	.	.000	.000	000	000	.000
	N	448	448	448	448	448	448
領域Ⅱ家族・夫婦関係.合計点(7項目)	Pearson の相関係数	.683**	1	565**	.419**	.412**	.831**
	有意確率(両側)	.000		.000	.000	000	000
	N	448	448	448	448	448	448
領域Ⅲ父親自身・男性性.合計点(9項目)	Pearson の相関係数	.667**	.565**	1	437**	.429**	.846**
	有意確率(両側)	000	.000		000	.000	.000
	N	448	448	448	448	448	448
領域Ⅳ父親自身の親子関係・合計点(2項目)	Pearson の相関係数	.453**	.419**	.437**	1	.314**	.592**
	有意確率(両側)	000	.000	.000	.	.000	.000
	N	448	448	448	448	448	448
領域Ⅴ社会(友人・仕事):合計点(2項目)	Pearson の相関係数	.422**	.412**	.429**	314**	1	560**
	有意確率(両側)	.000	000	000	.000	.	000
	N	448	448	448	448	448	448
FSCT合計点(5領域32項目)	Pearson の相関係数	.908**	.831**	846**	.592**	.560**	1
	有意確率(両側)	.000	.000	.000	.000	.000	.
	N	448	448	448	448	448	448

**. 相関係数は 1% 水準で有意(両側)です。

表４－１　子どもとの関わり・子育てとの主なクロス集計（）内ローマ数字は領域

	妻と私は(Ⅱ)		
2:子どもとの関わり・子育て	否定的	両価的・中間的	肯定的
夫婦は一体となって子どもと接する	24	44	174
%	9.9	18.2	71.9
夫婦はそれぞれの立場で子どもと接する	22	53	113
%	11.7	28.2	60.1
	妻と子どもは(Ⅱ)		
夫婦は一体となって子どもと接する	26	40	176
%	10.7	16.5	72.7
夫婦はそれぞれの立場で子どもと接する	16	54	118
%	8.5	28.7	62.8
	子どもがいうことをきかないと(Ⅰ)		
夫婦は一体となって子どもと接する	49	141	52
%	20.2	58.3	21.5
夫婦はそれぞれの立場で子どもと接する	59	101	28
%	31.4	53.7	14.9

表４－２　両親との関わりとの主なクロス集計

	母と私は(Ⅳ)		
3. 両親との関わり	否定的	両価的・中間的	肯定的
両親はともによく遊んで(関わって)くれた	35	80	77
%	18.2	41.7	40.1
母親はともによく遊んで(関わって)くれた	17	33	45
%	17.9	34.7	47.4
両親はあまり遊んで(関わって)くれなかった	30	46	18
%	31.9	48.9	19.1
	父と私は(Ⅳ)		
両親はともによく遊んで(関わって)くれた	33	82	77
%	17.2	42.7	40.1
母親はともによく遊んで(関わって)くれた	37	35	23
%	38.9	36.8	24.2
両親はあまり遊んで(関わって)くれなかった	39	34	21
%	41.5	36.2	22.3
	子どもがいうことをきかないと(Ⅰ)		
両親はともによく遊んで(関わって)くれた	37	109	46
%	19.3	56.8	24.0
母親はともによく遊んで(関わって)くれた	31	48	16
%	32.6	50.5	16.8
両親はあまり遊んで(関わって)くれなかった	27	56	11
%	28.7	59.6	11.7
	私にとって家族は(Ⅱ)		
両親はともによく遊んで(関わって)くれた	9	13	170
%	4.7	6.8	88.5
母親はともによく遊んで(関わって)くれた	5	3	87
%	5.3	3.2	91.6
両親はあまり遊んで(関わって)くれなかった	12	10	72
%	12.8	10.6	76.6

表４－３　両親の親としてのあり方との主なクロス集計

	母と私は(Ⅳ)		
4. 両親の親としてのあり方	否定的	両価的・中間的	肯定的
両親ともに良いお手本	31	71	85
%	16.6	38.0	45.5
両親よりも自分たちなりに	53	90	49
%	27.6	46.9	25.5
	妻と子どもは(Ⅰ)		
両親ともに良いお手本	13	51	123
%	7.0	27.3	65.8
両親よりも自分たちなりに	28	32	132
%	14.6	16.7	68.8
	父と私は(Ⅳ)		
両親ともに良いお手本	32	76	79
%	17.1	40.6	42.2
両親よりも自分たちなりに	75	73	44
%	39.1	38.0	22.9

表４－４　夫・父親としてのあり方とのクロス集計－その①

	妻と私は(Ⅱ)		
6. 夫・父親としてのあり方	否定的	両価的・中間的	肯定的
夫・父親として苦悩することが多い	19	45	98
%	11.7	27.8	60.5
夫・父親として苦悩することはない	19	30	146
%	9.7	15.4	74.9
	しつけ(Ⅰ)		
夫・父親として苦悩することが多い	9	56	97
%	5.6	34.6	59.9
夫・父親として苦悩することはない	13	44	138
%	6.7	22.6	70.8
	子どもと私は(Ⅰ)		
夫・父親として苦悩することが多い	16	43	103
%	9.9	26.5	63.6
夫・父親として苦悩することはない	21	27	147
%	10.8	13.8	75.4
	私はひとりでいると(Ⅲ)		
夫・父親として苦悩することが多い	49	58	55
%	30.2	35.8	34.0
夫・父親として苦悩することはない	38	68	89
%	19.5	34.9	45.6
	思い通りにいかないと(Ⅲ)		
夫・父親として苦悩することが多い	91	49	22
%	56.2	30.2	13.6
夫・父親として苦悩することはない	69	65	61
%	35.4	33.3	31.3
	子どもは私を(Ⅰ)		
夫・父親として苦悩することが多い	49	32	81
%	30.2	19.8	50.0
夫・父親として苦悩することはない	36	46	113
%	18.5	23.6	57.9
	暴力(Ⅲ)		
夫・父親として苦悩することが多い	13	51	98
%	8	31.5	60.5
夫・父親として苦悩することはない	16	34	145
%	8.2	17.4	74.4

表５　夫・父親としてのあり方とのクロス集計－その②

	思い通りにいかないと(Ⅲ)			
6. 夫・父親としてのあり方	A:情緒性	C:叙述的	E:その他	R＋F:無回答
夫・父親として苦悩することが多い	93	59	3	7
%	57.4	36.4	1.9	4.3
夫・父親として苦悩することはない	61	118	3	13
%	31.3	60.5	1.5	6.7

表6　各分類における領域ごとの反応頻度

			領域Ⅰ育児を含む父子関係		領域Ⅱ家族・夫婦関係		領域Ⅲ父親自身・男性性		領域Ⅳ父親自身の親子関係		領域Ⅴ社会（友人・仕事）		合計	
分類		記号	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
情緒性		An	2	0.0%	7	0.2%	1	0.0%	1	0.1%	1	0.1%	12	0.1%
		A＋	511	9.5%	429	13.7%	258	6.4%	15	1.7%	28	3.1%	1241	8.7%
		A±	157	2.9%	344	11.0%	131	3.2%	3	0.3%	13	1.5%	648	4.5%
		A－	55	1.0%	45	1.4%	299	7.4%	7	0.8%	20	2.2%	426	3.0%
小計				13.5%		26.3%		17.1%		2.9%		6.9%		16.2%
関係性	情緒的な関係	B1n	10	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	5	0.6%	0	0.0%	15	0.1%
		B1＋	340	6.3%	61	1.9%	81	2.0%	157	17.5%	2	0.2%	641	4.5%
		B1±	69	1.3%	19	0.6%	1	0.0%	52	5.8%	1	0.1%	142	1.0%
		B1－	60	1.1%	5	0.2%	9	0.2%	32	3.6%	0	0.0%	106	0.7%
	叙述的な関係	B2n	8	0.1%	2	0.1%	1	0.0%	12	1.3%	0	0.0%	23	0.2%
		B2＋	401	7.5%	44	1.4%	158	3.9%	59	6.6%	1	0.1%	663	4.6%
		B2±	150	2.8%	61	1.9%	9	0.2%	62	6.9%	47	5.2%	329	2.3%
		B2－	54	1.0%	28	0.9%	2	0.0%	88	9.8%	4	0.4%	176	1.2%
	相互的な関係	B3n	109	2.0%	7	0.2%	0	0.0%	1	0.1%	0	0.0%	117	0.8%
		B3＋	111	2.1%	325	10.4%	1	0.0%	32	3.6%	10	1.1%	479	3.3%
		B3±	13	0.2%	37	1.2%	1	0.0%	4	0.4%	0	0.0%	55	0.4%
		B3－	147	2.7%	9	0.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	156	1.1%
小計				27.4%		19.1%		6.5%		56.3%		7.3%		20.2%
叙述，考え方		Cn	1231	22.9%	249	7.9%	300	7.4%	196	21.9%	141	15.7%	2117	14.8%
		C＋	989	18.4%	961	30.6%	1549	38.4%	36	4.0%	451	50.3%	3986	27.8%
		C±	410	7.6%	124	4.0%	631	15.6%	22	2.5%	108	12.1%	1295	9.0%
		C－	37	0.7%	67	2.1%	77	1.9%	10	1.1%	11	1.2%	202	1.4%
小計				49.6%		44.7%		63.4%		29.5%		79.4%		53.0%
困惑・当惑		D	175	3.3%	52	1.7%	124	3.1%	8	0.9%	4	0.4%	363	2.5%
その他		En	36	0.7%	41	1.3%	81	2.0%	15	1.7%	18	2.0%	191	1.3%
		E＋	10	0.2%	1	0.0%	1	0.0%	1	0.1%	1	0.1%	14	0.1%
		E±	0	0.0%	0	0.0%	63	1.6%	0	0.0%	1	0.1%	64	0.4%
		E－	3	0.1%	2	0.1%	2	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	7	0.0%
小計				0.9%		1.4%		3.6%		1.8%		2.2%		1.9%
回答拒否		R	192	3.6%	115	3.7%	184	4.6%	63	7.0%	24	2.7%	578	4.0%
回答失敗		F	96	1.8%	101	3.2%	68	1.7%	15	1.7%	10	1.1%	290	2.0%
		合計	5376	100.0%	3136	100.0%	4032	100.0%	896	100.0%	896	100.0%	14336	100.0%

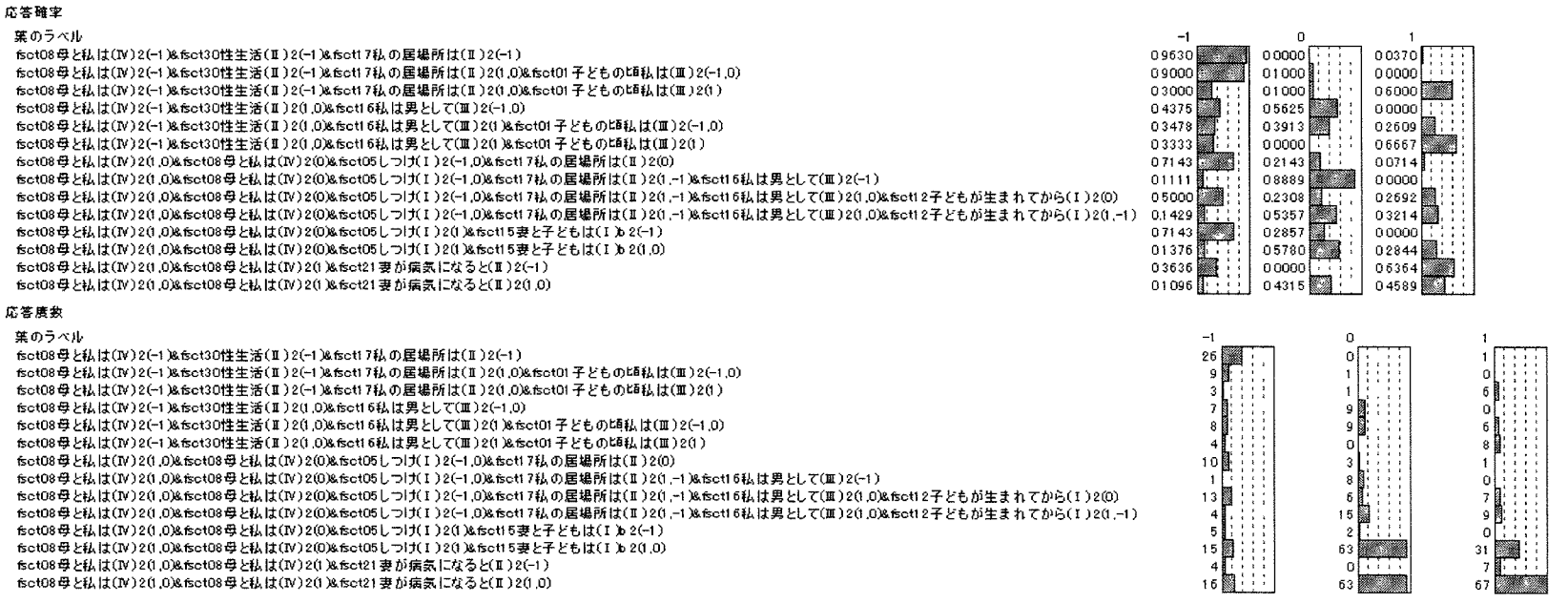

図１　「父と私は」のパーティション分析

応答確率は，パーティション分析によって分けられたパターン(パーティション)ごとの割合を示したものである。たとえば，上の図では，「母と私は(－１)」「性生活(－１)」「私の居場所は(－１)」というパターンでは，「父と私は(－１)」が０．９６３(９６．３％)，「同(0)」は０．０(０％)，「同(＋１)」０．０３７(３．７％)という割合になっているということである。応答度数では同じパターンでみると，「父と私は(－１)」が２６人，「同(0)」は０人，「同(＋１)」１人という度数になっている。ある程度，度数のあるものは，そのパターンが多いということになる。上の図では「母と私は(１，０)」「母と私は(１)」「妻が病気になると(１，０)」で「父と私は(－１)」１６人，同(0)６３人，同(1)６７人の計１４６人である。目立つ，度数の多いパターンを中心にみていくことが基本になる。また，否定感情に彩られた少数の特徴的なパターンを拾い出すことは臨床的に重要なことである。以下の図２から４についても同様にみていく。

応答確率

葉のラベル	-1	0	1
fsct16私は男として(Ⅲ)2(-1)&fsct28暴力(Ⅲ)2(-1)&fsct05しつけ(Ⅰ)2(1,0)	0.4000	0.0000	0.6000
fsct16私は男として(Ⅲ)2(-1)&fsct28暴力(Ⅲ)2(-1)&fsct05しつけ(Ⅰ)2(-1)	1.0000	0.0000	0.0000
fsct16私は男として(Ⅲ)2(-1)&fsct28暴力(Ⅲ)2(1,0)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(-1)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(0)	0.0000	0.3333	0.6667
fsct16私は男として(Ⅲ)2(-1)&fsct28暴力(Ⅲ)2(1,0)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(-1)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,-1)	0.6154	0.3077	0.0769
fsct16私は男として(Ⅲ)2(-1)&fsct28暴力(Ⅲ)2(1,0)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(1,0)	0.0571	0.2000	0.7429
fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,0)&fsct11私にとって子どもは(Ⅰ)2(0)	0.0313	0.5000	0.4688
fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,0)&fsct11私にとって子どもは(Ⅰ)2(1,-1)&fsct19思いどおりにいかないと(Ⅲ)2(-1,0)&fsct17私の居場所は(Ⅱ)2(0)	0.0000	0.4333	0.5667
fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,0)&fsct11私にとって子どもは(Ⅰ)2(1,-1)&fsct19思いどおりにいかないと(Ⅲ)2(-1,0)&fsct17私の居場所は(Ⅱ)2(1,-1)	0.0727	0.1727	0.7545
fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,0)&fsct11私にとって子どもは(Ⅰ)2(1,-1)&fsct19思いどおりにいかないと(Ⅲ)2(1)&fsct04妻と私は(Ⅱ)2(-1)	0.5000	0.0000	0.5000
fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,0)&fsct11私にとって子どもは(Ⅰ)2(1,-1)&fsct19思いどおりにいかないと(Ⅲ)2(1)&fsct04妻と私は(Ⅱ)2(1,0)	0.0119	0.0714	0.9167

応答度数

葉のラベル	-1	0	1
fsct16私は男として(Ⅲ)2(-1)&fsct28暴力(Ⅲ)2(-1)&fsct05しつけ(Ⅰ)2(1,0)	6	0	9
fsct16私は男として(Ⅲ)2(-1)&fsct28暴力(Ⅲ)2(-1)&fsct05しつけ(Ⅰ)2(-1)	9	0	0
fsct16私は男として(Ⅲ)2(-1)&fsct28暴力(Ⅲ)2(1,0)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(-1)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(0)	0	2	4
fsct16私は男として(Ⅲ)2(-1)&fsct28暴力(Ⅲ)2(1,0)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(-1)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,-1)	8	4	1
fsct16私は男として(Ⅲ)2(-1)&fsct28暴力(Ⅲ)2(1,0)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(1,0)	2	7	26
fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,0)&fsct11私にとって子どもは(Ⅰ)2(0)	1	16	15
fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,0)&fsct11私にとって子どもは(Ⅰ)2(1,-1)&fsct19思いどおりにいかないと(Ⅲ)2(-1,0)&fsct17私の居場所は(Ⅱ)2(0)	0	13	17
fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,0)&fsct11私にとって子どもは(Ⅰ)2(1,-1)&fsct19思いどおりにいかないと(Ⅲ)2(-1,0)&fsct17私の居場所は(Ⅱ)2(1,-1)	16	38	166
fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,0)&fsct11私にとって子どもは(Ⅰ)2(1,-1)&fsct19思いどおりにいかないと(Ⅲ)2(1)&fsct04妻と私は(Ⅱ)2(-1)	2	0	2
fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,0)&fsct11私にとって子どもは(Ⅰ)2(1,-1)&fsct19思いどおりにいかないと(Ⅲ)2(1)&fsct04妻と私は(Ⅱ)2(1,0)	1	6	77

図2　「子どもと私は」のパーティション分析

応答確率

葉のラベル	-1	0	1
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(-1)	0.9231	0.0769	0.0000
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(1,0)	0.4000	0.0000	0.6000
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(1,0)&fsct16私は男として(Ⅲ)2(0)	0.0000	1.0000	0.0000
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(1,0)&fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,-1)&fsct08母と私は(Ⅳ)2(0)	0.1000	0.1000	0.8000
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(1,0)&fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,-1)&fsct08母と私は(Ⅳ)2(1,-1)	0.2105	0.5263	0.2632
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(-1,0)&fsct08母と私は(Ⅳ)2(-1)	0.3448	0.2759	0.3793
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(-1,0)&fsct08母と私は(Ⅳ)2(1,0)	0.0901	0.2703	0.6396
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(1)&fsct02子育ては(Ⅰ)2(-1,0)	0.0978	0.1413	0.7609
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(1)&fsct02子育ては(Ⅰ)2(1)&fsct30性生活(Ⅱ)2(-1,0)	0.0119	0.2857	0.7024
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(1)&fsct02子育ては(Ⅰ)2(1)&fsct30性生活(Ⅱ)2(1)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(1)	0.0000	0.0000	1.0000
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(1)&fsct02子育ては(Ⅰ)2(1)&fsct30性生活(Ⅱ)2(1)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(0,-1)	0.0000	0.1837	0.8163

応答度数

葉のラベル	-1	0	1
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(-1)	12	1	0
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(1,0)	2	0	3
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(1,0)&fsct16私は男として(Ⅲ)2(0)	0	5	0
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(1,0)&fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,-1)&fsct08母と私は(Ⅳ)2(0)	1	1	8
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(1,0)&fsct16私は男として(Ⅲ)2(1,-1)&fsct08母と私は(Ⅳ)2(1,-1)	4	10	5
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(-1,0)&fsct08母と私は(Ⅳ)2(-1)	10	8	11
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(-1,0)&fsct08母と私は(Ⅳ)2(1,0)	10	30	71
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(1)&fsct02子育ては(Ⅰ)2(-1,0)	9	13	70
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(1)&fsct02子育ては(Ⅰ)2(1)&fsct30性生活(Ⅱ)2(-1,0)	1	24	59
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(1)&fsct02子育ては(Ⅰ)2(1)&fsct30性生活(Ⅱ)2(1)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(1)	0	0	31
fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct32妻とふたりでいると(Ⅱ)2(1)&fsct02子育ては(Ⅰ)2(1)&fsct30性生活(Ⅱ)2(1)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(0,-1)	0	9	40

図３　「妻と私は」のパーティション分析

応答確率

葉のラベル	-1	0	1
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(-1)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(-1)	0.8846	0.0000	0.1154
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(-1)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(1,0)	0.0000	0.2000	0.8000
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1,0)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)	0.8000	0.2000	0.0000
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1,0)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(-1,0)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(0)	0.0000	0.4615	0.5385
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1,0)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(-1,0)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(1,-1)	0.4211	0.1579	0.4211
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1,0)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(1)	0.0000	0.4091	0.5909
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(1)&fsct04妻と私は(Ⅱ)2(-1,0)	0.1313	0.2424	0.6263
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(1)&fsct04妻と私は(Ⅱ)2(1)	0.0766	0.0851	0.8383

応答度数

葉のラベル	-1	0	1
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(-1)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(-1)	23	0	3
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(-1)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(1,0)	0	1	4
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1,0)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(-1)	8	2	0
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1,0)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(-1,0)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(0)	0	6	7
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1,0)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(-1,0)&fsct22子どもは私を(Ⅰ)2(1,-1)	16	6	16
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(-1,0)&fsct12子どもが生まれてから(Ⅰ)2(1,0)&fsct24父と私は(Ⅳ)2(1)	0	9	13
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(1)&fsct04妻と私は(Ⅱ)2(-1,0)	13	24	62
fsct31私にとって家族は(Ⅱ)2(1,0)&fsct03将来，私は(Ⅲ)2(1)&fsct04妻と私は(Ⅱ)2(1)	18	20	197

図4　「私は男として」のパーティション分析